男の文章と女の文章

橋本治

平安時代の男は「漢字だけの文章」しか書けなかった

平安時代に、「日記」というものは、男が書きました。「日記」を書く文体は、漢文に決まっていました。女が漢字の本を読んでいるだけでへんな顔をされる平安時代なんですから、これはとても女の書くようなものではありません。だから、「男もすなる（男もするらしい）」です。この時代は男女の区別がはっきりしていて、「女が漢字を読めたらヘン」なんですから、女が男のしていることに詳しかったら、これもやっぱりヘンでしょう。それだから、紀貫之が〝女〟になって書いた『土佐日記』は、「男がする」ではなくて、「男もするらしい」という婉曲表現で始まるのでしょう。「男もすなる」の「なる」は、推量の意味です。

当時の「日記」は「男の書くもの」で、女が書くものではありませんでした。ところがそれを、紀貫之はわざわざ〝女〟になって書いてみたんです。どうしてでしょう？

私は、紀貫之が「有名な歌人」だったからだと思います。

和歌というものは、ひらがなで書きます。「男とは漢字の文章を書くもの」という常識の支配していた時代に、この紀貫之は、男のくせに「ひらがなを扱う名人」だったのです。だから、紀貫之は「ひらがなの文章」を書いたのです。

「漢字の文章を書くのは男だけ」という常識の支配している時代に、「ひらがなの文章」は「女しか書かないもの」です。「ひらがな使いの名人」が、自分のその特技を生かして文章を書くとなると〝女〟になって書くしかなかった――平安時代というのは、そんな不便な時代でもあったのですね。

紀貫之は「女流文学の時代」の先駆者

当時の公式文書はみんな漢文で、社会人である男にとって、「漢文を書く」というのは、必須常識でした。逆に言えば、「男は漢文以外の文章を書けなかった」ということです。「日記」というのは、そういう男が書くんですから、文章はもちろん「漢文」で、内容だって、「自分のこと」ではありません。「世の中のこと」や「政界メモ」みたいなものです。今でも、政治家の日記が時々「政界秘話」という形で出版されますが、漢文で書かれた平安貴族の日記も、そういう種類のものだったのです。『土佐日記』は、一人の女性が土佐（高知県）から京都まで旅行する間の記録ですが、当時にはそんな「日記」なんかなかったのです。

紀貫之は、そういう、当時としてはいたって変わった内容の「日記」を、わざわざ〝女〟になって書きました。歌人であった紀貫之は、同時に〝中央政府の役人〟でした。役人の彼は、実際に地方長官として土佐へ行ったんです。そういう経験のあった彼は、自分の経験したことを、「女の書くひらがなの日記」という形で書いたんです。「日記」というよりは、「日記の形をした小説」と言うべきものでしょうけれどもね。紀貫之が書いたのは、そういう種類のものでした。

ところで、平安時代は「女流文学の時代」です。この時代には、右大将道綱の母による『蜻蛉日記』や、『和泉式部日記』『紫式部日記』、菅原孝標の女による『更級日記』といったぐあいに、女たちの日記文学の名作がいっぱいあります。清少納言の書いた『枕草子』だって、「ひらがなの文章」です。だから、うっかりするとカン違いをしてしまいます――「紀貫之は、そういう女流文学の真似をしようと思って『土佐日記』を書いたのではないか」と。でもそれは間違いです。紀貫之は、そういう女性たちよりも

前の時代に生きていた人だからです。時代順からいって、紀貫之の方が先です。事実は、「紀貫之の『土佐日記』があったからこそ、後の時代の女性たちは自由にひらがなの文章を書くことができた」なのです。紀貫之が『土佐日記』を書かなかったら、後の女流文学は生まれなかったのかもしれないのです。